

ハイドン：オラトリオ「天地創造」Hob.XXI-2

1791年、ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）は、長年仕えたエステルハージ公爵家の任からずでに解放され、イギリスで演奏会を企画するハンス・ペーター・ザロモンの招きにより、ロンドンで自作の交響曲シリーズを開始した。そしてこの年の夏、ハイドンはウェストminster大聖堂で「メサイア」をはじめとするヘンデルのオラトリオを初めて聴いた。その壮麗な響きと聴衆の大きな反応に心を打たれたハイドンは、創作意欲を刺激される。そこからの経緯については諸説あって明らかでないが、ともかくもザロモンを通じて、一冊のオラトリオ用の台本を手にした。

1795年、ウィーンに戻ったハイドンは、英語の台本をドイツ語に訳してもらうため、宮廷図書館長のゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵（1733-1803）に台本を渡した。もと外交官で音楽にも博識なヴァン・スヴィーテン男爵はベートーヴェンの支援者としても知られる人だが、ウィーンでオラトリオを上演するために音楽協会を設立していた。実はモーツァルトも、この協会のためにヘンデルの「メサイア」を編曲している。ヴァン・スヴィーテン男爵は、新しいオラトリオへの期待を胸に、ハイドンから受け取った台本に手を加えながら翻訳を完成し、おまけに作曲上のアイデアまで書き込んだ。ハイドンの方も彼に助言を求めながら作曲したと伝えられており、「天地創造」はふたりの共同作業によって完成されたといってもよい。非公式な初演は1798年、上記の音楽協会で、公開初演は翌1799年、同じウィーンで、ともにハイドン自身の指揮によって行われた。

「天地創造」の台本は、キリスト教の旧約聖書の「創世記」と、これを題材にしたミルトンの「失樂園」などに基づいている。全体は3部からなり、第1部と第2部では、6日間にわたる神の天地創造を、ガブリエル（ソプラノ）、ウリエル（テノール）、ラファエル（バリトン）の3人の天使たちが歌う。第3部では、アダム（バリトン）とエヴァ（ソプラノ）が神を賛美し、エデンの園（楽園）で愛を語り合う。全体を通して合唱とオーケストラが重要な役割を果たす。

物語は次のように進行する。

第1部

第1日：神が天と地をつくり、光と闇を分けたことが歌われる。混沌を描写するオーケストラの導入部は神秘的で、不協和音も使われている。合唱が「神は言われた。光あれ！と。すると光が現れた」と歌うと、オーケストラが突然、大音量で輝かしい八長調の主和音をとどろかせる。ヴァン・スヴィーテン男爵も「光が生まれる瞬間の強烈な効果を生み出す」よう指示していた。

第2日：神が空をつくり、水を空の下と空の上に分けたことが歌われる。

第3日：神が海と陸を分け、陸に草木を芽生えさせたことが歌われる。天使ラファエルのアリアでは、オーケストラが波打つ海などを巧みに描写する。

第4日：神が昼と夜を分け、太陽、月、星をつくったことが歌われる。フルートとヴァイオリンIがゆくりと上昇して、太陽が昇って行くようすを描写する。3人の天使と合唱による、「もろもろの天は神の栄光を語り」で第1部が幕を閉じる。

第2部

第5日：神が水の中の生き物、空を飛ぶ鳥をつくったことが歌われる。生き物の中にはクジラや怪物レヴィアタンもいる。

第6日：神が地上の生き物をつくり、最後に人間の男と女を生み出し、天地創造の偉業が完成したことが歌われる。オーケストラがライオンの吠え声や虎の跳躍、牛や羊たちの牧歌的な情景などを描写する。天使ウリエルが人間の創造を歌う。合唱が「偉大なる仕事が完了しました」と主への賛歌を歌い、第2部が幕を閉じる。

第3部

(ここからは、天使のラファエル、ガブリエルを歌っていたバリトン、ソプラノが、アダム、エヴァの役にかわって歌う。)

アダムとエヴァが創造主である神を賛美した後、愛を語り合う。最初にウリエルが見守るなか、ふたりが神への感謝を歌うと、神を賛美する合唱も加わって、星、太陽、月、諸元素、靄と霧、草木、花、動物などの万物に、賛美の歌を歌え！と呼びかける。ふたりの愛の二重唱に続いて、天使ウリエルがカップルを祝福すると、「すべて声あるものよ、主に向かって歌え！」と歌い出す合唱が壮麗なフーガに発展し、独唱者たちも加わって全員で主を賛美し、全曲は幕を閉じる。

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

遠山菜穂美

<楽器編成>

フルート3、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、
ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、チェンバロ、弦五部、
独唱ソプラノ、独唱テノール、独唱バリトン、混声四部合唱

※スコア上の表記